
おばけのてんぷら

芽が出たたまねぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばけのてんぷら

【Nコード】

N0565A

【作者名】

芽が出たたまねぎ

【あらすじ】

幽霊を退治する天使警察の話。ホラーじゃないし、怖いシーン、グロテスクなシーンはありません！仲間たちと一緒に主人公は学校生活と任務を両立できるのか……！！頑張れ！少年！！

キーパーソン

信濃川高校に佐倉祐太郎は通っていた。
いつもの平凡な毎日。

良い事なのだが、好奇心旺盛な彼は少し退屈していた。

しかし、ある日でてきた人物がきっかけで彼の日常はがらっと変わるようになる。その

「ある日」

が一週間前だ。ここは彼のいる2 - Bだ。

「起立！きょうつけ！礼！」

「おはようございます」

ばらつきのあるあいさつが終わったあと、クラスの生徒たちがのろのろと着席した。

皆随分ねむたそうだ・・・といっても、いつも眠たそうなのだが。

「なあ・・・」

祐太郎に前の席の男子が声をかけた。

彼は祐太郎の親友で、沖田真治という。二人は何かと子供っぽく、話が合う。

「何？」

真治の顔がニコニコしている。だから祐太郎は少しワクワクした。

「今日転入生がくるらしいぜ。」

「え！？」

祐太郎はとても驚いたようだった。

しかし次の瞬間には目をキラキラさせていた。

そのリアクションは誰が見ても一目瞭然に彼の心情がわかるくらいオーバーだった。

もちろん、いくら祐太郎でもただでこんなに大げさなのではない。

彼はこのクラスで唯一の一人席。

つまり今隣がないのは祐太郎だけだから、転入生が来た場合、彼

の隣になるのだ。

祐太郎と真治はすごい勢いでお互いの想像の転入生を話していた。

もはや止められようがなく、いきすぎるところまで話はいつていた。

「足にジェットがついてるんだぜ！きつと！」

「違うよ！腹が電子レンジになってんだよ！」

そのとき担任の長井が

「静かに！皆さん！今日は新しいクラスメートをしようかいきます！」

と言った。ざわめきがおこる。祐太郎と真治は、自分たちは早く知っていたということ得意そうな笑みを浮かべた。ガララ・・・転入生がドアをあけた。めがくりつとした女子だった。そして二人はほぼ同じタイミングで思った

「（足にジェットが）（腹にレンジが）ついてねええっ！！」

と。そう、これが運命の出会いだった。もつとシリウスさが欲しかったが・・・この後は簡単にまとめると3人が仲良くなり、お互い行動をともにする親友に近い仲となって日々をすごすだけなので話を現在にもどそう。きょうは9月22日祐太郎はすばらしくぼけ～としながら学校に向かっていた。

「おはよー！！！！」

元気よく女子があいさつをしながら合流した。

登校中たまたま会ったら一緒に登校。

それが彼と仲の良い2人の決まり。

というか自然にそうだったので法則と言おう。

さて、彼女が例の人物だ。

大沢実花だ。

無邪気で明るく、癒し系というか天然というか、どことなくぼやぼやした雰囲気をもっている。

この日の学校も普通だった。

実花が毎度のように教科書を忘れたり、3人で授業中なもの忘れられるほど熱くくだらない話をして先生に怒られたり、三人で笑いながら

秘密基地である屋上にある倉庫で弁当を食べて・・・変わったことは、放課後祐太郎が一人で居残り掃除をした。

ただそれだけのことであるはずだった。いつもなら

「私も残るよ」

という美香の一声がかかり、

「じゃあないな、俺だけ帰ると悪役みたいでやだから手伝ってやるよ。」

と真治が加わる。

といった形なのだが、k yとうは実花が用事があるということであるとはいかなかった。

ふと祐太郎が後ろを振り向くと、誰もいないはずなのに、顔色の悪いおっさんがたっていた。

祐太郎はもう、そのおっさんが生きてないことを知っている。

しかしたいして驚きもしなかった。

もう慣れっこだった。

こういうのには・・・確かに小さい時には怖かった。

しかし彼ら・・・幽霊は脅かすだけで危害を加えないことがわかった。

それに、なぜか祐太郎に会うと彼らのほうから逃げてしまうことも多い。

最近祐太郎がきずいた事がある。

集中してみると、彼らの頭にはあれがあるのだ。

あの昔じみた幽霊の象徴であるあの三角の布・・・まあ、祐太郎が見るのは白じゃなくて黒だが・・・そして今、ふと祐太郎はそのことを思い出し、もっとよく見れば新しい発見があるのではないかとマジマジと霊のおっさんの頭の方を見つめた。

すると、布に白く文字が書かれているのがわかった。

こういう新しい発見が本当にあつて祐太郎は驚いた。そして

「は - 0 3 - 2 2 1 7・・・?」

と、そこに書いてある文字を口にした。

おっさんはいくらいいビクツとした。

まるで自分の靴下に納豆が入ってたみたいにな。そのあとオッサンは

「G・V・Aだったのか・・・やられた。」

と呟くやいなや

「くそーっ」

といって襲い掛かってきた。

「うわっ！」

と祐太郎が腕を楯のようにしたのとほぼ同時に、

「バシユウッ」

とすごい音がした。

オッサンが消えていくのが見えた。

そして、蒸発して天に昇っていく金色の粉のようなものの辺りから、白い魂のような、お化けのようなものがうきあがった。

「捕獲体制万全！ネット発射！！」

と言う声が聞こえ、それはネットの中に捕まった。捕まえた声の主は、なんと実花だった。

キーパーソン（後書き）

あの・・・つまらなかったと思いますが読むのであればやめないでください・・・。本当にしばらくすれば面白いんで・・・いや本当におねがいします！！

混乱（前書き）

第一話・・・長くてほんとにすみませんでそいた！！

混乱

「実花・・・？」

祐太郎は、この状況を察することができなく、呆然とした。

「私たちね、あなたを迎えにきたの！一緒に仕事できるなんて凄くうれしい！祐太郎君を仲間に入れるって決まった日からね、私待ちどしくって・・・」

実花は祐太郎の困惑した表情をよそに無邪気にはしゃいだ。

「ちょ・・・ちよつと待ってくれよ！俺には何が・・・」

祐太郎がそういったとき、オッサンが消えたときにでてきたモクモクとした白い霧のむこうから、20代くらいの勇ましそうな、黒髪の男が現れた。

「はっはっは。おい、実花。彼はいま混乱してんだ。そう急ぐな。」

「あ、そつか。ごめんなさい祐太郎君。」

「いや、あの・・・」

祐太郎が、頭をかきかき次の言葉を探していると、男は

「まあ、気を取り直して・・・」

と言ってから笑顔で、大きな声で

「君はG・B・Aに加わることになったんだ！！おめでとう！！歓迎するぞー！！」

と言った。

「本当ですか！？やったー！」

もちろん祐太郎は素で喜んだ。その後すぐに、ある疑問がうかんだ。

「あの・・・G・B・Aは何ですか？」

そう言った時、後の二人がとても驚いた。

「え．．．！？知らなかったの！？」

「それは計算外だ！色々説明しなければならないなあ。」

男はそういつてしばらく考えた。その間に、祐太郎は彼にとってシヨッキングなものを見てしまった。

黒々としたでかいゴキブリを知らぬ間に自分の足が踏んでいた事実を．．．。

「うぎゃあああ！！ラ．．ラクカラーチャー！！！！（ラテン語：ゴキブリ）」

そう叫ぶやいなや、彼はこけた拍子に机の角に頭部を強打した。気絶した祐太郎のできあがりだった。

混乱（後書き）

第三話で面白くする予定なので、第三話も是非見てください。お願いします！

どういつと??

祐太郎が起きると一見、何の変哲もない少し懐かしい雰囲気のある家にいた。

そして実花と男からここが彼ら、G・B・Aの秘密基地であること。

実は天使というのは本当にいて、新しい生命を作り出す組織と、悪さをするゴーストを退治するG・B・Aのふたてに別れていること、その他色々なことを教えてもらった。

「だいたいわかったけど現実離れしすぎているよ・・・」
祐太郎が不安げにいった。

「ほう、美香から君はかなりのドリーマーだと聞いたが・・・そうか・受け入れにくいよなあ。はっはっは」

「でもね、わたし達月組は人手がたりないのよ・・・このままじゃいつ解散命令がくるか・・・」
「月組・・・?」

「ああ。G・B・Aの方はその中でも15グループに分かれてるんだ。」

「じゃあ美香やえ〜と・・・」

「正志。私達は正兄ってよんでるから、正兄でいいよ!」

「いや、そっちの方が慣れてるからそう呼んでくれ!」

「あ、はい!」

「さっきの続だが、そうだ。俺達はその15グループのうちの月組だ。」
祐太郎はもうG・B・Aの存在を信じていた。というより好奇心を掻き立てられていた。「あ・・・あの俺・・・」

「ん?何だ?」

「迎えとか言ってたけど俺、G・B・Aに入れるんですか?」「え・・・?」

「はっはっはもちろんだとも!!」「やったー!!!」

祐太郎はものすごく喜んだ。それを見た二人もすごく喜んだ。まるで
「バンザイ！バンザイ！」
と言ってる三人はバーゲンで掘り出し物をゲットしたオバハンみたい
だった。

どういふこと？

(後書き)

パソコンがうまく使えないから「続き」って書くのに「ぞくき」ってやって変換します。

メンバー紹介（前書き）

自己紹介したいのにやりかたがわからない・・・（うーん）こんな情けない自分ですがよろしくお願いします！

メンバー紹介

「そうと決まれば自己紹介だ！おーい！はいつていいぞー！！」

正兄がそういうとソロソロと・・・いや、今のは嘘だ。

伊達っ婆いというかいかにもモテそうな銀髪の少年とキャスケットをかぶったチビスケがでてきた。二人ではソロソロとは言わない。

「俺はラスク。よろしくな。」

銀髪の方が手を差し伸べた。

「おう、俺は祐太郎。」

祐太郎は彼の手をとって握手をした。

「焼きそば、お前年いくつ？」

ラスクが聞いた。

「え、俺？今は16だ。」

祐太郎は答えた。

「へえ、じゃあ俺と一緒にだな。」

そう言っでラスクはニツと笑った。

「あれ、お前俺のこと焼きそばっていわなかった！？祐太郎だから！俺、祐太郎だから！！一文字も合っでねえよ！」

祐太郎はつつこんだ。おそらく、これが漫画だったら

「ガビーン」

という効果音が入っただろう・・・

「うつさいなあも、わかってんよそんなの。でもお前にはそれがあつてんだよ。つべこべいうな。いや、むしろありがたがれ！」

「逆ギレかよ！いいよ、お前のこともパン菓子ってよぶからな！！」

「ストーリープツ」

そんな二人の会話をさえぎるようにちびスケが叫んだ。

「いつになったら俺の順番になんだよ！」

祐太郎がそちに顔を向けた。

「おう、悪かったな・・ちびスケ、お前の名前は？」

「チビって言ったな！！餓鬼扱いすると痛い目合うぞ！！」

そう言くとちびスケは素早くキャスケツトの上に行っているゴーグルを目にあて、マスクをした。それから

「俺はな、マーク・ウィンテッドっつーんだ。」

と言ってポイとドクロが描かれた小さな黒い玉を祐太郎に投げた。

「ヤベ」

とラスクが言い、正兄も実花も腕で顔を防ぐ体制をとった。

もちろんラスクも・・。三人の行動はほんの一瞬で完了した。

「ん？」

祐太郎が何気なくそれを受け止めた瞬間、その玉はボンツと言う音とともに爆発した。そして灰色の空気がいつきに広がった。

「うわあああー！！目・・目がい・・ハックション！！痛・・

ハックション！！ウオオオオハックション！く・・くしゃみと涙が・・

ハクシュツ！と・・止まらねえ！！」

涙とくしゃみにやられている祐太郎を見て

「どうだい！！この未来のからくり職人マーク様が開発した泣きっ

面に蜂爆弾！！ちなみに主材はたまねぎとコショウだ！！」

と得意そうにマークは言った。

祐太郎のくしゃみと涙の地獄は5分続いたのだった。

なんだかんだで仲間とうちとけられて良かった良かった。

メンバー紹介（後書き）

あけましておめでとございます！！後書きで書くことではないと思いますが、今年も良いお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565a/>

おばけのてんぷら

2010年10月9日05時43分発行